

(1) エリアごとのまちづくりの方向性

これからのまちづくりの推進に向けて、墨田区の成り立ちやめざすべき方向性など都市の物理的特性から捉えたエリアを設定し、それぞれの個性を活かしながら区全体の魅力や価値の向上につなげます。

① すみだ北部エリア

◆ まちづくりの方向性

- 下町らしい風情ある雰囲気や歴史・文化を育みつつ、地域とともに災害に強い安全性の高いまちなみを形成します。
- 鉄道の立体化や都市計画道路整備、木造密集市街地の改善に係る事業など市街地整備を通じて、新たな魅力ある空間や交流を生み出す場づくりを進めます。
- 生活道路や身近なみどりの創出を図りつつ、荒川など周囲の豊かな自然環境とのつながりを形成し、快適でうるおいのある市街地環境づくりを進めます。

◆ エリアの成り立ちや特性

元来複数の村が所在した地域で江戸時代への新鮮野菜の供給地として発展しました。明治時代には川沿いに工場が置かれるようになり、明治22(1889)年には鐘ヶ淵地区に紡績工場（後の鐘紡、現クラシエ）が操業を開始するなど、次第に工業化が進みました。加えて、東武鉄道や京成電鉄の鉄道敷設が行われ、特に関東大震災後に人口が急増し、昭和7(1932)年には向島区が設置されました。また、江戸時代より頻繁に発生していた洪水対策として、明治末年より荒川放水路の整備が着手され、昭和5(1930)年に完成しました。

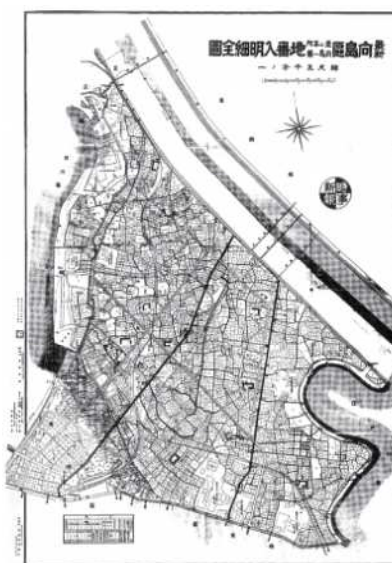
戦時中、空襲で向島区の約57%が焼失し、大きな被害を受けました。京成線東側の現在の押上一、三丁目の一部（約9.6ha）で戦災復興土地地区画整理が実施されましたが、大半が旧街区のまま復興した

ため、市街地の大半は旧来の狭く屈曲する道路のまま住宅や工場が建ち並び、産業のまちとして復興する一方、木造密集市街地が形成されました。

戦後の東京への人口・産業の集中に対し、昭和30年代半ばより工場立地の抑制政策がとられたため、多くの工場と従業員が転出しました。そして、工場の跡地に公営住宅や民間の団地が建設されるなどし、まちの様相は変化していきました。市街地の防災対策の必要性が高まる中、昭和43(1968)年に白鬚東地区防災拠点の建設が都市計画決定され、広域避難場所や高層の住宅団地が建設されました。

このように、都市基盤が未整備のまま市街化が進んだエリアで、木造密集市街地の改善など防災まちづくりが進展しています。また、大規模な住宅団地や低層で多くの路地空間などを持つ下町らしい風情あるまちなみが共存するエリアです。

図 II-1 昭和八年最新向島区地番入明細全図



墨田の地図 一その二一 より転写

②すみだ中央部エリア

◆まちづくりの方向性

- すみだの豊かな歴史・文化と、市街地開発等による新たな都市空間・都市施設が融合した、すみだ固有の魅力とにぎわいのあるまちづくりを進めます。
- 隣接区と連携した観光交流の拠点として、すみだの顔にふさわしい活力あふれる市街地環境づくりを進めます。
- 隅田川・北十間川のつながりなど水とみどりのネットワークを形成し、安全で快適に歩ける回遊性の高い交流空間づくりを進めます。

◆エリアの成り立ちや特性

江戸時代、大部分が武家地として発展した本所と、田園が広がる向島の中に位置し、牛嶋神社や三囲神社、長命寺など有名寺社が多く参詣者を集めました。著名な文人墨客も訪れるなど、江戸近郊の代表的な行楽地として発達しました。明治時代には、東武鉄道の延伸により吾妻橋駅（現とうきょうスカイツリー駅）が設けられ、鉄道と北十間川とを結ぶ船堀が整備され、陸運と舟運、旅客や貨物の集まる交通結節点として発展してきました。大正12(1923)年の関東大震災で、まちは壊滅的打撃を受け、現在の震災復興土地区画整理事業が実施されました。

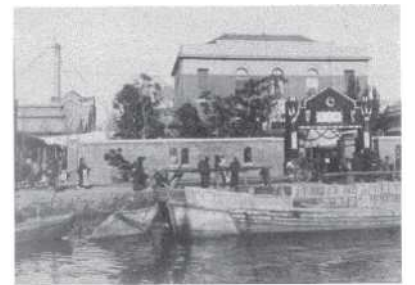
空襲により再び焼失しましたが、戦後、押上地区の一部は震災復興土地区画整理が実施されました。周辺には日本初の生コンクリート工場が立地するなど、高度経済成長を支える各種企業の立地が進みました。モータリゼーションの発展により、平成5(1993)年に東武鉄道は伊勢崎線での貨物輸送を廃止し、以来都心における大規模な未利用地としてその再開発が期待されました。

この間、隅田川沿いではアサヒビール吾妻橋工場の再開発が行われ、リバーピア吾妻橋が平成2(1990)年竣工しました。

業平橋駅の旧貨物ヤード跡は新タワー建設地となり、平成24(2012)年5月に東京スカイツリー®を含む日本有数の観光拠点・東京スカイツリータウンが開業し、まちなみは大きく変貌を遂げることとなりました。隣接する浅草周辺から隅田川を渡って歩いてくる観光客の流れも多く、墨田区側の船着場が積極的に使われるようになったこともあり、新たなまちの顔としての役割が求められています。加えて、北十間川でつながる文花地区には大学研究施設が整備されるなど、新たなまちづくりが期待されています。



貨物ヤードと船渠（ドック）の様子（昭和22年）



花王吾妻町工場落成式（吾妻町／現墨田区文花・花王すみだ事業場）（大正12年）

③ すみだ南部エリア

◆ まちづくりの方向性

- 地域の歴史や文化を守り育みながら、これらを活かした地域固有の魅力とにぎわいのあるまちづくりを進めます。
- 整った都市基盤を活かしながら、個々に魅力あるスポットや快適な歩行者空間づくりを進めるなど、回遊性が高く交流を育む市街地環境づくりを進めます。
- 成熟した市街地の建替え等更新を通じて、まちの質的向上や地域によるマネジメントの促進など、まちの価値を高め持続的なまちづくりを進めます。

◆ エリアの成り立ちや特性

明暦3(1657)年の大火の後に、武家屋敷や町屋・寺社などの移転先としてこのエリアの開拓が計画され、第二次開発後の元禄初年以降、下級旗本や御家人の屋敷が広く展開する武士の新興住宅地が形成されました。また、この本所開拓の過程では横十間川や縦川など人工河川が開削され、物流の動脈ともなり、河岸地を拠点に町人地も展開し、都市化を進めました。

明治11(1878)年に、当該エリアには本所区が設置され、当時、戸数は14,500戸あまり、人口は43,952人でした。近代化をめざす国の殖産興業政策により、近代工業発祥の地として、掘割に沿って大規模工場が立地し、数多くの町工場が集まって、化学や機械・金属、出版・印刷など様々な工業が発展しました。

大正12(1923)年9月1日の関東大震災により、本所区は95%を焼失しましたが、翌年からは震災復興区画整理が開始されました。復興事業では他に、江戸時代に形成された道路を拡充し、新たな幹線道路の建設が進められ、公園や鉄筋の小学校、下水道施設、同潤会住宅等の整備などが行われました。

昭和20(1945)年3月10日の東京大空襲などの空襲により、本所区の96%が再び焼失する壊滅的な被害を受け、戦後、江東橋、錦糸町の一部で戦災区画整理事業が実施されました。

昭和40～50年代には、両国駅及び錦糸町駅の周辺を中心とした市街地整備が進みました。昭和59(1984)年、両国国技館が完成し、翌年1月より本場所は蔵前から両国に戻りました。隣接する江戸東京博物館の建設などとあわせて、伝統・文化を活かしたまちづくりを展開しています。また、錦糸町駅周辺では、東京都による東の副都心の取り組みと、貨物駅や精工舎跡の再開発により、住宅に加え商業・オフィスや文化施設など高次都市機能の集積・整備が進みました。現在では、こうした住宅や商業業務施設などの経年化に伴う更新の必要性が高まりつつあります。

図Ⅱ-2 大正元年本所区地籍地図
(町丁別本所区全図)



墨田の地図—その二—より転写

図Ⅱ-3 本所向島区の戦災による焼失区域



本所・向島両区の戦災による焼失区域
『帝都近郊戦災焼失区域』(部分)より作成

④ 隅田川沿川エリア

◆ まちづくりの方向性

- 隅田川によって育まれた歴史文化、豊かなみどりを守り育みながら、多くの人々が集い交流する場にふさわしい魅力ある環境づくりを進めます。
- 沿川の市街地と水辺の連続性、一体性の感じられる市街地環境づくりを進め、快適でうるおいのあるまちづくりを進めるとともに、都市の活力を高めます。

◆ エリアの成り立ちや特性

中世より隅田川を利用した運送が経済を支え、江戸幕府が開かれて以降は、その川岸や川に通じる運河の周辺に、多くの倉庫が立ち並び運送業や旅客業が発達しました。また、屋形船や釣り舟、猪牙舟（ちょきぶね）、渡し舟なども発展して、交通の軸としてだけでなく、川遊び、堰堤（せきてい）での花見など多くの市民の行楽地として親しまれていました。

明治期以降、隅田川の船便による交通手段の利便性から、川沿いに多くの工場が建てられ、しだいに工業地帯化しました。一方で、幾多の洪水被害に見舞われました。特に明治 43(1910)年の大洪水では、7,063 か所の堤防が決壊、浸水家屋 51 万 8 千戸、被災者 150 万人と広範囲にわたって被害が起きました。これを契機に、政府はかねてより懸案とされてきた荒川放水路の掘削を決定し、北区岩淵から直接東京湾への放水路の建設が始められました。



明治 43 年の大洪水
墨田の今昔写真集(墨田区文化観光協会)より
転写

約 20 年の年月を費やして、昭和 5 (1930)年に荒川放水路が完成し、隅田川は荒川の支流とされました。その後も水害は続き、戦後の昭和 22 (1947)年のカスリーン台風などで被害を受け、カミソリ堤防と呼ばれる高い堤防が建設されました。

高度成長がもたらす恩恵の一方で、工場や家庭からの有害な排水の増加は、隅田川の水質を悪化させ、また高いカミソリ堤防などの治水工事は、水の都の景観を失わせることになりました。隅田川に沿って、首都高速道路と墨堤通りなどの幹線道路が整備され、北部では東白鬚防災団地やマンション、学校、病院等の比較的大規模な建築物が立地する市街地が形成されました。南部では、一部に大規模施設も立地していますが、中低層の事務所・工場・住宅が混在する市街地が形成されました。

川沿いには寺社や庭園などの歴史文化を色濃く残すとともに、工場や倉庫、住宅団地などのまとまった土地利用等、多様なまちなみがみられます。水辺の再生・活用とともに、隅田川と市街地との一体的なまちづくりが求められています。